

新川通信

第18号

題 字： 佐藤 大作

令和7年4月15日発行

巻 頭 言

東日本大震災を風化させず、防災力を高めるための訪問

【東北訪問】

令和6年11月12日から14日にかけて「越後新川まちおこしの会」（以下「新川の会」）主催による「東日本大震災を風化させず、防災力を高めるための訪問」（新川の会10名、市民8名の18名）に参加しました。

「新川の会」による被災地訪問は今回が9回目です。その大半は1泊2日でしたが、最終回の今回は2泊3日で岩手県の釜石市まで、全16箇所の訪問というハードなスケジュールでした。その分興味深いことが数多くありました。

その中で特に印象に残ったことが2つあります。

1つ目は、どのように復旧し復興したかです。気仙沼市の唐桑半島舞根地区と、南三陸町のきわめて対照的な復興を行った2箇所について述べたいと思います。舞根地区では居住地はすべて高台に移転し、旧居住地や漁港施設などはそのまま残し、巨大な防潮堤や水門といった土木構造物は建設しませんでした。

これに至る経緯を、現地でNPO法人「森は海の恋人」の副代表の畠山信様からお聞きすることができました。この復興手法は国の方針とは真逆で、とにかく行政との交渉が大変で、とりわけ関係者全員の同意が必要であり、舞根地区の自然をそのまま残すことに苦労されたとのことでした。

このご苦労により、漁港施設等は被災前の姿そのまま、三陸の漁村の姿を残していました。



防潮堤を作らなかった舞根地区と沈下で出来た汽水域の池

世話人 藤田 太子

また、河川もコンクリートで固めることなく、併設したビオトープからも魚類や鳥類などの生息の貴重なデータを得ることができ、全国からも注目されていることをお聞きしました。

一方の南三陸町は、基本的な復興方針と考えられるような、巨大な防潮堤、水門、そしてコンクリートブロックで三面を固められた堤防。旧南三陸町防災庁舎を中心とした震災復興公園。二階建ての複雑な構造をした歩道橋。飲食店やお土産物店などが立ち並ぶ「さんさん商店街」。そして隈研吾氏の設計による「南三陸311メモリアル」が整備されていました。



八幡川に架かる中橋と震災伝承施設「南三陸311メモリアル」

復旧・復興はもとより、観光施設も併せて整備しているようです。以前、震災から約半年後の9月にこの地を訪れた時、旧南三陸町防災庁舎は、津波により壊滅的な被害を受けた町の中にあって、それなりの存在感を示していました。

しかし今回見た姿は当時とは全く異なり、巨大なコンクリートの堤防や、整備された公園施設に囲まれて鍋底のようなところに置かれ、遠くから見ると壊れたジャングルジムのようになってしまいました。

震災から14年が経過しましたが、これから10年、50年、100年とこれら施設はどのような経過をたどるのでしょうか。



旧南三陸町防災庁舎は嵩上げ地の底で見守るように鎮座する

2 つ目は、震災遺構がどのように伝えられているかです。震災遺構を数箇所訪問しましたが、強く印象に残ったのが「山元町震災遺構中浜小学校」でした。

ここでは、震災当時教員をされていて、現在語り部をなさっている方から約 60 分間お話を聞くことができました。



中浜小学校で当時教員であった方より体験を聴く参加者

校舎は現在使用されておらず、震災後に多少の瓦礫類を撤去したものの、当時の姿をほぼそのままに残しているとのこと。このため外灯や案内看板などの倒れた方向や、割れた窓ガラスと割れなかった窓ガラスの位置関係などから、津波が海から垂直に到達したのではなく、渦を巻くように到達したことや、二階の天井近くの痕跡からどの高さまで到達したことなど、建物自体が貴重な資料館にも感じられました。そして、震災当日は最終的に屋上の物置のような施設に避難することになりますが、決定するまでの緊迫した様子もお聞きすることができました。

実は、震災 2 日前の 9 日に小規模の地震が発生していました。そこで念の為、翌 10 日に職員会議で地震時における避難についてマニュアルを調べ、津波避難計画では坂元中学校への避難が定められ、所要時間は 20 分以上であることを確認していました。そして 11 日 14 時 46 分に大震災が発生してしまいます。気象庁大津波警報の第 1 報は、宮城県では津波到達予想時刻 15 時、津波高 6m でした。これではマニュアルによる坂

元中学校への避難は不可能で、垂直避難しかありません。ところが、15 時になっても津波は到達せず、15 時 14 分に大津波警報が更新され、津波予想高が 10m に変更されました。これから最後の大きな決断となります。体育館のギャラリーでは高さが 6m で足りず、屋上の日頃は物置として使用している施設に避難する他にない。苦渋の決断ですが、しかし、計算をしていました。もともとこの小学校は津波に備えて周囲より 2m 盛土をして建設しており、1 階と 2 階の 4m ずつを足せば 10m になる。「祈るしかなかった！」とのことでした。

途中から、当時の井上剛校長先生が時間に間に合いお話に加わりました。その中で、教職員、児童、近隣の方々約 90 名が屋上の施設に避難し、最後に校長先生が屋上への扉を閉めることとなります。その時「必ず生きて帰ってくる！」と自分に言い聞かせたと話しておられました。そして 15:45 に第 1 波、15:50 に最大津波の第 4 波が襲来しましたが、全員無事に帰ることができました。この様に大地震発生という緊急時にわずか数十分の間で、錯綜する情報の中で数多くの事を判断しそして決断するという緊迫した状況がよく分かりました。この震災遺構を大切に残し、そして確実に伝えて頂きたいと考えます。



宝来館女将の岩崎昭子さん 森は海の恋人の畠山信さん

そして驚くべき話をお聞きしました。1 日目に宿泊した旅館「宝来館」の女将さん、それに NPO の畠山様は大津波にのみ込まれましたが、無事に生還されたとのことでした。

3 日間、多くの話をお聞き、多くのものを見、そして避難路を登るなど体験しました。これからも「新川の会」このような企画があればぜひ参加したいと考えています。

東日本大震災からの日々を回想して

世話人 加藤 功

越後新川まちおこしの会が発足してまだ4年目のよちよち歩きの年に、東日本大震災が起きました。

巨大地震による津波で太平洋側に甚大な被害が発生すると共に、東京電力福島第一原子力発電所の水素爆発に伴う住民避難がありました。新潟市西区にも福島の方が多く避難してきました。

あの東日本大震災から13年を迎える9回目を、会の最後の訪問行事と定めた日々を回想しました。

私が最初に被災地に行ったのは、震災から一か月後の4月14日でした。当会顧問の大熊孝先生が友人の宮城県気仙沼市舞根の畠山重篤（今回初日に訪問した畠山信さんのお父さん）さんに、ガソリン、お米、お酒などの救援物資を届ける運転手で震災地へ行きました。

当時はまだ三陸海岸線の道路が津波で寸断されていた上、海岸線の都市は軒並み津波被害で宿泊できる宿はありませんでした。

その為、宿泊は内陸部の盛岡のホテルを取り、4月14日早朝に物資を載せて大熊先生と出かけました。

「地震で決壊した藤沼ダムの現場」

三陸海岸へ行く前に、福島県須賀川市の藤沼ダムの決壊事故現場に向いました。

東日本大震災の津波と原発事故に隠れてあまり報道されていませ

んが、藤沼貯水池の農業用ダムの堤防が壊れ、田植え前ではほぼ満水の150万 m^3 全てが流出し、泥流はまたたく間に下流の住宅を呑み込み、全壊19戸、床上浸水33戸、床下浸水22戸と8名の犠牲者が出、1歳の幼児が未だ行方不明のままの場所です。

須賀川には1級河川の阿武隈川が流れていますが、一番低い所を流れているため長年、この長沼は水不足に苦しんでいる土地でした。そこで近隣の1町2村の住民が、農業用水を確保するために国や県に要望し、昭和12年県営事業として着工、工事の大半を地域住人が人力で行い、太平洋戦争を挟んで12年の歳月を費やし、昭和24年完成した人造の貯水池でした。



決壊した藤沼ダムの場所

地震によるダム決壊事故としては国内において最初であり、あの巨大津波が三陸沿岸をのみ込む前の出来事でした。

藤沼湖から泥流が流れ下った滝地区より沢沿いに30分程登りましたが、杉林が根こそぎなぎ倒されていました。幅30m程の沢にそって進むと、岩だらけの中に、ガードレールが無残に下流に折れ曲がり、上流のコンクリート水路の一部がころがっていました。

その惨状を見ながら500m程登ると、藤沼湖の堰堤の決壊現場に出ることが出来ました。堤は幅約80m、深さ15m以上がV字に大きく削られていました。



貯水池には水は無く、乾いた大地が広がる藤沼ダムの決壊現場

上部の堤には、地震後一ヶ月以上も経っているのに大きな亀裂がいくつもパッキリと口を開け、湖面に水はなく、湿った土砂が対岸まで続いていました。

決壊現場を覗き見ると、そこは正しく下流の8名の命を奪った沢が広がっています。大自然の優しさとその袖に隠れた自然の猛威に戦慄の震えが来たのを今でも覚えています。

津波が宿命の三陸海岸

東北自動車道を江釣子で降りて釜石市に向かいました。山沿いの道を抜けて町に入ると、道の両端に津波で流れて来た家の残骸が積み上げられています。

更に進み海が見える平らな場所に出ると家並みはすっかり津波で流され、家と思われる場所に瓦礫だけがある風景がその後も延々と続いていました。



海が見えると 両側に瓦礫が広がる町に木造住宅はない

50 年以上前の昭和 46 年 10 月、住所不定で無職の私
が先輩からいただいた三菱コルトに車中泊しながら半
年間かけて日本一周の城めぐりをしていた時、三陸を
一週間かけて見て廻った事を思い出しました。

当時岩手県の海岸線は「陸の孤島」、「日本のチベッ
ト」と呼ばれ、行く事だけでも大変でしたがそこで暮
らす人々の自然の厳しさを知りました。

当時の日記を見ると、「国道 45 号線はまだ全体の 1/3
しか舗装されていない。海辺の町の平地を抜けるとす
ぐに山に入りトンネルで山向こうに出る。かつての旧
道は海沿いを通っていたのでこのトンネルが出来て隣
町に行くのに近くなったが、必ず山を越えなくてはな
らない」とあります。

三陸の海の豊かさがある反面、湾の奥の少ない平地
とすぐ裏に山がある地形です。明治 29 年の岩手沖地震
津波、昭和 8 年の三陸沖地震津波、昭和 36 年のチリ津
波と地震と津波を経験していた地域でしたが、海の近
くの海拔数メートルの土地が町となり発展した結果、
今回の地震による津波で甚大な被害が生まれたと言わ
ざるを得ない現実を見せつけられた思いでした。

更に進むと二階に漁船が載っている風景や津波に
よる火災で焼けたと思われる町並みが続いています。



津波と火災で町はこの様な光景がいたるところにあった

その日は宮古市田老地区の惨状を午後 6 時過ぎの暗
がりの中で確認し、宿泊先の盛岡市に向いました。

52 世帯中 44 世帯全壊の気仙沼市舞根地区

翌日はホテルで朝食後すぐに盛岡を出発、東北自動
車道を南下し目的地の気仙沼へ向かいました。一関か
ら気仙沼市に入りましたが山中から町に下だると、町
中は津波で流された家や車が道路端にそのままになっ
ている処があります。

港のタンクから流失した油火災で丸焼けの錦町を
抜け、峠を越えて唐桑半島の舞根に入りました。

細い谷筋の結構高い場所まで津波が来ていました
が、畠山さん宅は海拔 25m の高台にあったので、津波
被害には会わなかったと歓迎してくれました。

畠山さんのやっている NPO 法人 森は海の恋人は、
海は山の恵みによって作られており、山が荒廃すると
海も悪くなるので、山を育てる活動を続けている団体
で、畠山さんはカキ漁師です。

ここは 1m 程地盤が沈下したそうです。高台の自宅
前の道の半ばの木に、カキのブイが引っ掛かっており、
津波がここまで来たと説明してくれました。



舞根で畠山重篤さんが私達に 津波の事を語ってくれた

津波は一般的な海の波とは異なり、海水の壁が押し
寄せてくる。第 1 波が高さ 5~6m、1 階平屋の建物を
飲み込み山側に持ち込んだと思ったら、引き潮で一気
に海側へ持って行かれた。第 2 波は高さ 10m の津波が
高台の自宅にも押し寄せると思い、近くの人達と一
緒に裏山へ皆で昇って避難した。

その引き潮たるものは、木造家屋は全て、コンクリ
ート建屋は外壁を残して全てを海に引き込んでしまう
恐ろしい光景であったと。

畠山さんは最後に「93 歳の母親を街中の施設に預け
ていて津波で亡くしたことが悔やまれるが、津波や海
を恨む心情は無い、海は壊れてなく必ず再生する」と
語ってくれました。

あれから約 14 年が経ちました。津波のあった被災地
に行く毎に瓦礫が整理され、そして無くなり、土地が
嵩上げされ建物が建ち始め、街が大きく変化して行く
様子が見たくて、これまでも毎年来ました。

被災地へ来ている原点は、畠山
重篤さんの言っていた「豊かな三
陸の海を見る」があるからです。



東日本大震災 藤沼ダム決壊波映像

東日本大震災を記憶に残すための被災地訪問に参加して

一般参加者 小林 淳子

2泊3日 1,100 kmの旅に参加して、たくさんの被災地を歩き、見学し、話を聴かせていただいた。

巨大防潮堤や宝来館の裏山の避難路を登り、東日本大震災遺構となった学校や施設の中に入り、津波が襲った港、町、田畑の今を見た。三陸鉄道に乗りあの日を想像した。未だに住めない帰還困難区域の紅葉する森の沿道をバスでぬけた。知らなかった地震・津波・放射能汚染被害の体験をした方々から直にお話を聞いた。

3日目の最後の訪問先は、浪江町の「希望の牧場」。バスから降り立った私達に気付き、牧場主の吉沢正己さんが軽トラに乗って現れた。吉沢さんは東京電力福島第一原子力発電所の排気塔が見える程近い牧場の畜産農家だ。



東日本大震災後も被爆した牛を飼い続ける吉沢さん

原発汚染後の国の殺処分処置を拒否し、今も被爆した200頭近い牛に13年間ずっと餌をやり続けている方だ。新潟から来た私たちに強いメッセージをくださった。

「西の巻（旧西蒲原郡巻町）、東の浪江・小高」と言われていた。原子力発電所立地に反対運動で抗い拒否した。旧西蒲原郡巻町の住民反対の機運は高かった。今では合併で新潟市内が立地候補だったのだ。

あの戦争は国策が間違っていたでしょう。原発推進、再稼働は国策が間違っている。そうであれば声を上げねば。

天災は人間が止められないが、人間がやることは止められる。核兵器、核爆弾そして原発は、人間が止めることができる。

吉沢さんのお父さんは戦時中に満州に移住し、戦後シベリアに抑留され、帰国後苦労してこの地を開拓し牧場を拓いた。『なぜ、それを奪われ、そこを追われるのか。』

新潟の東京電力柏崎・刈羽原発はまだ再稼働していない。再稼働すれば、今後起こりうる危険性をこの福島が教えてくれている。



私たち外来者が来たので 牛も集まってくる

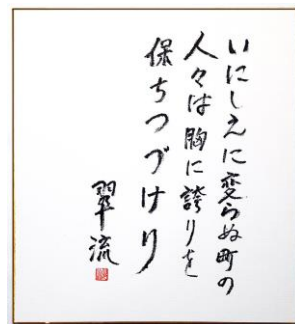
広い緑の丘陵地に散らばるたくさんの茶色い牛が草を食み、時おり頭をもたげ、訪問者の私たちを見ている。原発事故の生き証人とも言える牛たちは、吉沢さんに世話をされ生きている。13年間この牧場で生きて来た。

私にはUPZ 圏内（原発より5～30 km）に孫がいる。私の未来、家族そして子孫の未来、故郷の未来の舵取りは自らの手でやらねばと強く思った。富岡町の木田節子さんの言葉を紹介する。

「今は福島のこと、

いつかはあなたの町のことに」

（『鎮魂と抗いの12年』彩流社より）



笹川 悦夫氏 作品

志津川どっせ ～南三陸3.11メモリアル～

事務局長 小泉 勇

私は、越後新川まちおこしの会の事務局を担当していたので、東日本大震災の研修会に毎回参加してきました。

東日本大震災の南三陸地震は、1948 (H23) 3 月 11 日 (金) 14 時 46 分 18.1 秒にマグニチュード 9.0 が発生しました。

私たち越後新川まちおこしの会では、その年の 11 月、南三陸町の 3 階建ての防災庁舎に見学に行きました。ここは、絶対に津波に安全だと言われていました。しかしこの建物より高い波にのまれ、最後まで避難を呼び掛けていた、放送係の皆さんや役場の関係者の多くの人が災難に遭いました。最初に見学した時は、近くに高台があるのになんでここにいたのだろうと疑問に思いました。



災後から 8 カ月後に訪ねた際の南三陸町の防災庁舎

何回か参加した後、ここは、昔来たことのある志津川というところだと、気付きました。

私は、一般に言う転勤族です。北は、北海道から南は、名古屋まで歩きました。ここに来たのは、仙台支店の時でした。

この仙台支店は、西暦 1993 (H5) 年から 7 年間勤務しました。(いまから 30 数年前の事です)

昔の日記を見ると 1998 (R10) 年 8 月 4 日に志津川高校武道場の建増するための地質調査に来ていました。打ち合わせに構内に入ると高校生は、礼儀正しく好感の持てる学校でした。学校は、高台の山の上で、地耐力もありあまり問題の無いところでした。

その後の日記には、志津川高校の記載がないので、大きな問題は無かったのでしょう。この時チラッと南三陸ホテル観洋を見た記憶があります。

その後このホテルに、朝日新聞社の三浦記者のついで、宿泊のお世話になったことがありました。このホテルは断崖の上に建てられ、海側の下層階に浴場があり、津波で浴場の窓ガラスが割れたが上の階は、大丈夫で営業でき、私達も宿泊できました。

お客は、最初、報道陣が来てその後、建設業者が来て、お客様の变化があったそうです。その話を聞いてなるほどと一人うなずきました。

この南三陸町を通過するときは、何と土地の低いとかろかと、海の底に引き込まれるような、ザワザワするような気持ち悪い気分におそわれ、一目散に通り抜けたことを覚えています。

しかしこの頃、車を運転していると「志津川どっせ」という言葉を聞いています。何の宣伝をしていたのでしょうか。今でもよくわからない不思議な言葉です。

この街に住んでいた人が津波の時、どうやって逃げたか、河北新報社の記事を紹介します。

『濁流が迫り、やぶをかき分け逃げた』

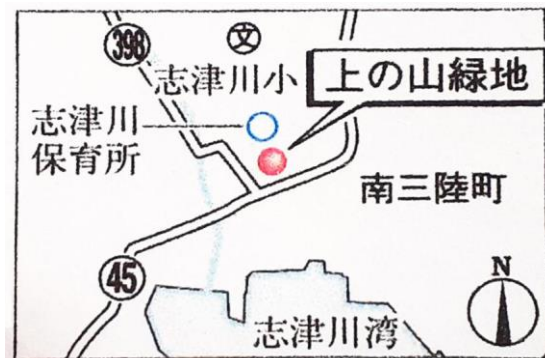
山内春子さん【64 歳】南三陸町志津川十日町・主婦

私が見た大津波：河北新報社編（抜粋）

長女が住む十日町で、2 歳になる孫の子守をしているときに地震が起きました。孫と勤め先から帰ってきた三女と 3 人で指定避難所の上の山都市緑地を目指しました。避難していたら、「ゴー」という地鳴りのような音とともに、目の前に真っ黒な津波が押し寄せて家や車、木材が流されていきました。

ここも危ないという叫び声で、さらに高台の志津川保育所へ逃げました。園庭にも濁流が迫ってきたので、裏山伝いに志津川小学校まで逃げました。

公立志津川病院に勤めていた、長女と気仙沼にいた義理の息子とは数日後、再会で泣きました。



『がれきの道をつくった男』

「南三陸日記」朝日新聞出版 三浦英之著

震災の2日後に初めて南三陸町に入った時、私は二つのことに驚いた。

一つは、海から3kmも離れた集落が、がれきの山でおおわれていたこと。もう一つはそのがれきの中にすでに、人が通れるほどの一筋の道ができていたことであった。

その「がれきの道」を作ったという人がいると聞き、訪ねてみることにした。大山正昭さん(46)。地元工務店の作業員だ。「大したことはしていない」と少し恥ずかしそうに話してくれた。

激震の日、母(75)を連れて山へ逃げた。直後、まちはがれきで埋め尽くされた。「これじゃ、救助が入ってこれない」津波の2時間後は、もう無傷だった重機で道路上のがれきの撤去に乗り出していた。夜、プロパンガスの漏出する音が響く中、重機の明かりだけを頼りに作業を進めた。一睡もせずに翌日も作業を続け内陸部から町中心部へつながる約4kmの道を作った。「やるかやらないか。結局は自分自身の問題なんだよ」

消防士、警察官、自衛隊員、土木作業員。

被災地で尊敬を集めているのは、決して雄弁と言えない男だけである。

「志津川どっせ」という不思議な言葉は、このような作業員の心意気のことだったのであろうか。気になる町である。



津波で廃車となった車と瓦礫の山がいたるところにあった
大船渡市で 2011.11.13

血の通った復旧復興を

一般参加者 根津ヒロ子

今回の被災地訪問で初日に訪れた気仙沼市の唐桑NP0 法人“森は海の恋人”では、防波堤を作らないという選択した地域を見学して、元通りに回復するだけが復興政策ではないということを改めて感じました。

完璧なハードなどはどこにも存在しないことは、岩手県宮古市田老地区の巨大防波堤が1978年に高さ10メートル、全長2.4キロで完成し、当時は「万里の長城」呼ばれていました。しかし、今回の東日本大震災の大津波では一部が決壊し多数の犠牲者が出てしまい安全神話は崩壊しました。要するに防波堤では完璧ではないことが証明されました。

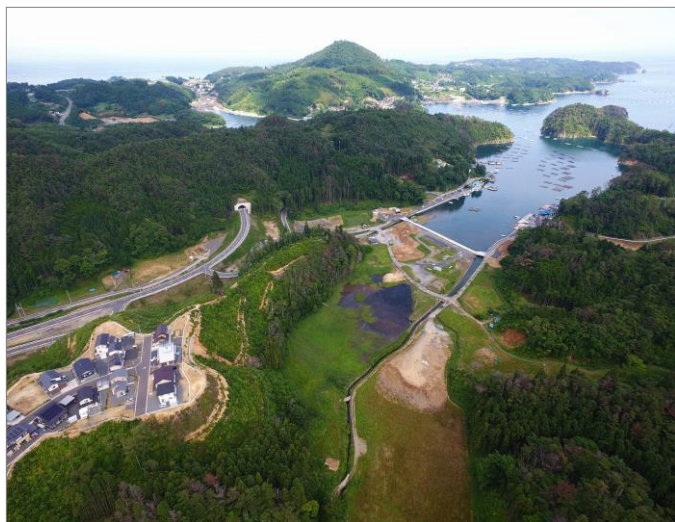
それに対して“森は海の恋人”を見学した際、その活動に感動しました。

美しい自然を、未来に繋げるために1「環境・教育」、2「森づくり」、3「自然環境保全」の3分野を軸として、畠山さんを中心とした今までの地道な活動がありました。

東日本大震災時では、この地域の自然にもコミュニティにも甚大な影響を及ぼしました。震災によって形成された湿地は、今は大変貴重な生物の宝庫となっているのを私達は見学しました。

そして、それを実行するに当たり畠山さんは、地域住民の説得をし、実現されるなど各方面への働き掛けが並々ならぬ事であったと想像されました。

この地域の住民は、防波堤に頼らず震災後に形成された生態系の維持や、自然環境を生かし、農業用水路の確保など多面的な効果を生む魅力的なまちづくりを選択されたことに対しても感動しました。



防潮堤を作らないと決めた舞根地区と沈下で出来た汽水域の池

東日本大震災を記憶に残すための被災地訪問に参加して

会員 百崎 進

2024 年 11 月 12 日～14 日の 3 日間、東北大震災で、13 年目をむかえる宮城県気仙沼市唐桑～福島県浪江町津島地区の 12 か所のその後の現状を訪問、見学、現地の方のお話を伺うに参加させていただきました。

越後新川まちおこしの会主催のこのような会に今回で 3 回目です。今回の訪問は、以前伺った時とは大きく違っていました。それは大地震、津波による被害の痕跡が見られなかったことです。

被害に遭った建物が遺構として残された建物を見、お話を聞いてようやくその真実を知ることが出来ました。今回の訪問で特に印象に残った所は、1 日目の宿泊宿「宝来館」です。

このホテルの女将さんは、震災の語り部として、今現在も広く当時のこと、それと災害への備え、心構えについて語ってくださいました。



宝来館は 2 階まで津波被害を受けた

私自身はこの「宝来館」の事に以前から関心を持っていました。甥が震災当時の地域の状況、宝来館の女将さん（岩崎昭子さん）と地域の方々の災害後の励まし、助け合い、共に生きて頑張りましょうの活動を、同僚と共に「あれからの日々を数えて」の本としたのを読んでいたので、その人に直にお会いできて、お話を聞かせてもらいとても良かったです。

その女将さんは語り部となって、来訪者の人たちに「まずはすぐに高い所へ逃げましょう！」と訴えていました。

14 日、山元町震災遺構の中浜小学校に行きました。海岸から 300m の所に建ち、平地で、被災当時津波は二階天井までに及んだとのこと。4 階建ての中学校までは遠く、逃げることは困難と判断し、屋上屋根裏に逃げ込み、寒さと余震で震えながら一夜を過ごし、保

護者も含め 90 人の命が助かったとのこと。そのように判断し、実行した当時の校長、教頭が語り部となって、状況を話してくれました。

東京電力廃炉資料館に行き、話を聞いてきました。今現在の原子力発電所はどうなっているか。新聞、テレビでの報道は少しされていますが、今の現状とこれからが問題です。溶けている核燃料、それを冷却している放射性物質を含んでいる処理水。トリチウムの海洋放出など、まだまだ多くの問題が有るのでは無いでしょうか。

「安全だ」「安心して」と神話を訴えて進めてきた原発。なぜ設置前に上記の内容を克服せずに建設して来たのか。人の命を無視しての進め方は異常と思えます。

いまさら言いますが、福島の電気を東京が使用している。柏崎刈羽の原発もそうです。東京で使用する電気は、東京で原発をすれば良いのではないのでしょうか。この度の各地での遺構訪問で感じたことは復旧作業が進み、13 年前の面影は見られず、新たに新興宅地と思わせるようになっていました。

遺構を見ない限り、そこに地震が有り、津波が来たのかと惑うばかりでした。住宅は高台に移住し、河川の土手はコンクリートで高くされ、海との境の堤防は 20 メートルにも嵩上げされ、自動開閉する水門も頑丈に造られています。平地からは海の様子は見えません。確かに津波に対する対策は頑丈なものとなっては来ています。そのことで果たして復旧、復興はされたのでしょうか？物理的には改善されて来ている。しかし内面的、心の面での復旧復興はどうなのでしょう？すべてが新しくいいのでしょうか？住民、町づくりこれは（新川まちおこしの会）にも通ずるものと思います。

建物が、地域が、コミュニティーが行われ、人が人として生きやすく、暮らしやすく、昔のままでなく、進化する社会の中で新しい社会関係、人間関係（コミュニケーション、コミュニティー）を進めていかなければ成らないのかと感じさせられた訪問でした。運営、進行された方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

最近思うこと

副会長 西尾 光弘

私事ですが、今年の1月で56歳となりました。いつの間にか定年に向けてカウントダウンが始まったと感じる今日この頃ですが、最近はその簡単にはサラリーマン生活をやめさせていただけないようです。どこも人手不足ですからね。

昭和62年に高校を卒業し農林水産省に採用となり福井県から新潟にやってきたのが38年前。右も左もわからないまま巻駅に降り立ったのを昨日のこのように思い出します。

6畳一間の寮に住み始めた時は、これから生きていくのか非常に不安になったのを覚えております。

その寮では、食堂でよく飲んで議論が交わされておりました。今のようにインターネットやスマホはなく、情報は人づてに話を聞くしかなかった時代でした。

最近では、あまり人と話をしなくても情報が入ってくるので人間関係が希薄になっているのでしょうか。

巻に農林水産省の事業所が出来る前は内野に農林省の事業所（新川農業水利事業所）がありました。そこにも寮があり若い方たちが相当内野駅前あたりで飲み歩いたというのを地域の方々からお聞きしている次第です。



今はない二代目内野駅にあった「鶴の友」の看板

その新川農業水利事業所あったころ造成された排水機場などが最近世代交代となり役目を終え新しい機場に生まれ変わりつつあります。

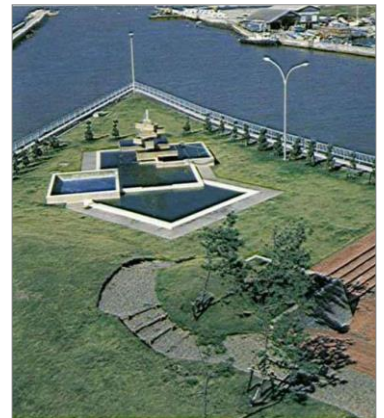
旧木山川排水機場はすでに新しい機場に移行し、鎧潟を干拓した時に造られた鎧潟排水機場も新機場が稼働し旧機場が近々取り壊されるとのこと。また田潟排水機場も旧機場の建替工事が進められている状況です。新川河口排水機場の自然排水樋門も古い樋門はすでに取り壊され新しい樋門の工事が進められています。これまで地域を守ってきた施設が姿を消すのは寂しいことだなと感じます。

それでも、新川右岸排水機場脇の五郎左衛門公園には旧機場の電動機と羽根車が展示されており、かつての姿を見せてくれるのはありがたいです。

最近気になって気づいた事がありまして、新川河口排水機場の中州には噴水がついた公園が整備されました。中々そこには立ち入ることが出来ず遠くから眺めるだけでしたが、四角形や長方形が組み合わせられなかなか面白いデザインだなと思っておりました。

残念ながら自然排水樋門の工事でその公園は取り壊されたようです。

この噴水はどのような方がどのような思いで設置されたのか、調べましたがわかりませんでした。どなたか知っておられるかたがいましたらお教えいただけると嬉しいです。



新川河口排水機場海側にあった公園

最近、排水機場などが更新され新しくなると、デザイン的につまらないなどとお言葉をいただいたりします。モノづくりも基準や規格が整備されてくると、そんな感じになってしまうのでしょうか。

機能や効率を追求するのも大切ですが、その施設の思いなどを表現するデザインも地域の方々に理解いただいたり、知っていただいたりするには重要だなと感じるこの頃です。

私も若いと思っていたらいつの間にか次の世代に先人の思いを引き継ぐ年になってきました。

次世代に何を残すか、そんな事を考えながら、越後新川まちおこしの会の活動も続けていきたいと思っています。

新川まるごと博物館で草刈りをしていると、時々興味をもって来られる方が訪ねてこられます。微力ながらそんな方々に先人の思いを伝えられたらと思って案内させていただいたり説明させていただいたりしております。

今後も少しずつですが先人の思いを伝えていきたいと思っています。

5年間の会長職を終えて

会員 山中 清蔵

令和2年(2020年)図らずも、越後新川まちおこしの会の会長職を拝命しました。

丁度この時期、新型コロナが発生し、2020東京オリンピックも順延になり、予防接種に迫られる生活が続きました。その年は新川開削200年に当たり、計画していた200年記念行事が中止や延期となりました。

そんな中でしたがlive配信で令和4年1月より、新川開削200年事業の連続講座が5回開かれました。

当初の計画では、当会顧問の大熊孝新大名誉教授による基調講演と藤沢周氏との対談を内野まちづくりセンターで行う予定でした。だが新型コロナ感染拡大防止のためセンターが休館となりましたため、当会顧問の大熊河川研究所をお借りして講演と対談を行う事となりました。第4回よりは、内野まちづくりセンターで公開講座を行う事が出来る様になりました。これも時代の流れの一コマで、今思うと懐かしい思い出となりました。

中山真さんの『文芸の故郷』構想に基づく様々の事業の内『文芸の故郷回廊紀行』では、内野・五十嵐まちづくり協議会、コミュニティ中野小屋、コミュニティ佐潟の3協議会の合同行事で行なわれました。いずれも地域を越えた事業は特筆すべき事だと思います。

平成21年5月31日、第1回の『新川野外音楽祭』が新川沿いの静田神社境内で始まりました。

しかし会場が屋外で行うため天候の問題、駐車場の確保、トイレの設置などの諸問題が重なり平成25年が屋外での最後となりました。

その後、内野まちづくりセンターが完成した事や内野まちづくり協議会での開催により、新たに地域活動補助金を使用した事業「新川音楽祭」として再開し現在に至り、内野町の文化活動の一つの大きな柱となっています。



新川の悠久な流れ 撮影：渡邊宏海

この内野町の文化活動の柱を今後も続け躍進するためには、新川音楽祭実行委員会を中心に委員を募集、入場料、寄付で運営費を賄う、『にいがた総踊り』方式が理想に思っています。

11月24日(日)午前7時半頃、突然起き上がれず、救急車にて、新潟脳外科病院に運ばれ、MRIの結果、脳梗塞、右不全麻痺、推定入院期間、2週間以上との診断でした。

退院前の主治医との面接で、運転に関して、控える方がよいとのコメントが添えられていました。

両側内頸動脈、後頭動脈など多発性狭窄症の症状を、モニターで見せられ、再発の恐れがあり、再発の場合は重症化が懸念されると言われ、愕然としている心境です。今後は、再発を防ぐ為、再発のサインを見逃さず、血栓を防ぐ薬物療法と生活改善とさらに一人で出来るリハビリに取り組まなければなりません。

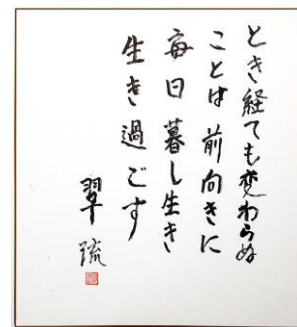
入院から退院までの間に様々の関係者の心温まる励ましに感謝申し上げます。

又、今後は、正常な復帰等は無理なので、会長職の継続は辞退させていただきました。

5年間不甲斐ない会長で、ご迷惑をお掛けしました。越後新川まちおこしの会の皆様に5年間大変お世話になり、お礼申し上げます。

今後は、体が許す範囲で、会員とし、お手伝い出来ればと思っております。ご理解とご支援を賜ります様、伏してお願い申し上げます。

5年間本当に有り難うございました。



笹川 悦夫氏 作品

「つとめ」を果たす

世話人 渡邊 宏海

ご無沙汰しております。この場をお借りして、私から皆さまにご報告がございます。一昨年に、私たち夫婦の間に初めての子どもが誕生しました。日々大きく育ち、活発に動き回る我が子の成長力に喜びつつ、一刻たりとも目の離せない毎日です。

そんな中このたび第二子となる子どもを授かり、今年に入り産声を上げました。こちらも元気に育ち、さらに家庭が賑やかになりました。乳幼児のふたりを育む親として、つとめを果たす所存です。



初めての子と初めてのごあいさつ

さて今「つとめ」を平仮名で記したのは、「つとめ」と読ませる漢字が「勤め」「務め」「努め」など多数あり、いずれも父親となった自分にとって響くものがあるからです。「務め」は、割り当てられた役割を遂行することであり、父親としての立場を実感するものです。また「勤め」は、食い扶持を得るべく就業に専念することであり、世帯を持つ身として第一に大切なことです。そして「努め」は、定めた目標を達成すべく尽力することであり、子どもの健やかな成長を願う保護者のありとあらゆる奮闘と言えるでしょう。ちなみに「勉め」「力め」と漢字を充てることもあります、意味合いは「努め」に近いので省略します。

労働を「カセギ」「シゴト」と分類する見方があります。「カセギ」は私利を、また「シゴト」は公利を求めるものであり、この場合「勤め」は「カセギ」に近い概念と言えます。また「シゴト」は「ツトメ」と言い表すこともあり、「務め」はこちらに相当するでしょう。

「勤め」「務め」「努め」のいずれも、目的のために自分の持つエネルギーを使うことで共通しています。またいずれの字にも「力」が入っており、この字形は土を掘る鋤（すき）を象ったものだそうです。そんな事を調べていると、新川開削に携わった江戸時代の人々の働きが思い浮かびました。

伊藤五郎左衛門に代表される願人たち、開削の普請を担った村々の人々、また北国街道沿いの小さな町を在郷町にまで大きくさせた人々など、一人ひとりが様々な「つとめ」を果たしたに違いありません。ここで、彼らの「つとめ」について思いをはせたいと思います。

五郎左衛門ら願人たちは各藩の括りを超えて結束し、藩や新潟町、金主となる商人を相手に粘り強く交渉に「努め」、三瀧悪水抜きを実現させました。村々の代表としての「務め」を、役職や家までもを掛けて果たそうとした五郎左衛門の執念は、我々が次の世代に語り継がなければなりません。

願人たちの集めた人手が、三瀧から海までの放水路の開削、また西川の迂回や踏み車による地下水の汲み上げ、そして底樋の建造から敷設へと割り当てられて力を振るいました。通水という一つのゴールに向け、様々な現場がそれぞれの「務め」を果たしました。

この世紀の大工事を、新川通水後の新田開発による米の増収を望んだと見れば、村々の参加者たちは三瀧悪水抜きの大事業に「勤め」たとも言えるでしょう。また内野に「カセギ」を求めて、飲食や娯楽などを提供した人々の「勤め」はさらに人を集め、やがて内野で「勤め」る人を集めるまでになったと考えるのも楽しいでしょう。

こうした当時の人々の様々な「つとめ」の結果、現代に生きる我々は個性あふれる内野町や西蒲原の田園を受け継ぎ、ひいては新川を始めとした排水システムに支えられた快適な生活を享受しています。翻って、父親という重大な役割を受け持った私には、果たすべき様々な「つとめ」もあることになります。

令和の今日この頃、従来の固定的な男女観を見直すジェンダーレスの考え方が広がりつつあり、親という観点でも母や父という立場に執着せず融通を利かせるべきなのでしょう。私もおおむねそれに賛同しつつ、父母として埋めがたい性差や得意不得意があることも否定はしません。親であり父であるという意図で、父親という表現にしています。

そんな父親としての「務め」を果たすには、越えがたい障害というものが私には有ります。

編集後記

事務局長 小泉 勇

学生時代に頭部の外傷を負って以来、高次脳機能障害というものを負っています。新型コロナウイルス流行期に感染者の厄介な後遺症が話題になりましたが、共通点が多いと感じたのでそちらでイメージすると分かりやすいと思います。

そんな障害を持つ身として、家族や職場の方々の理解・協力を受け日々を送っています。しかし、子ども相手にそれを求める訳にはいきません。幼い子どもから常に目の離せない状況は、脳の疲労しやすい私にとって負担が強いものです。それでもこれまで子育てに「努め」てきたことで、必要な能力や体力が備わったという自信になっています。

ハンデ持ちの身で、かつ一足も二足も遅れて就職したこともあり、「カセギ」は十二分とは言えず心苦しいものですが、勤続を重ねていることで幸い少しずつ上積みしてきています。有り難い「勤め」を大切にして、家族を満たしていきたいと思います。

「つとめ」を果たすには、続けること。それを保つために、辿り得る目標を定めること。その場に立つために、自らの力を蓄えること。一人では越えがたい壁には他者の協力を得ること。行き詰まったら、時に寄り道して進路を改めること。

新川の物語を知り、私は知らず知らずのうちに導かれていたのでしょうか。ともかく、大きな目標に掲げたのですから、「つとめ」を果たします。

子どもの小さいうちはなかなか会員としての活動に参加できず、申し訳ございません。

また皆さんと一緒に活動する日のために、つとめます。



幼な児のふたり初めて せいくらべ

今回は、「東日本大震災を風化させず、防災力を高めるための訪問」と銘打って特集しました。

行くに当たり、仕事の都合や体調を崩して行けなくなった方や、法事が重なり無念の断り、出発まで色々とありましたが、越後新川まちおこしの会会員 10 名と市民参加者 8 名の合計 18 名で、北は岩手県宮古市田老地区から南は福島県大熊町までを巡ってきました。

巻頭言を書いていた初参加の藤田さんからの①復旧・復興の方法と②震災遺構のお話がありました。市民参加の小林さんからは、風化の進む東京電力福島第一原発の放射能汚染問題が書いてあります。

参加者皆様の感じた生の声をお聴きください。

何回か訪問すると大津波に巻き込まれた人、さらに驚くべきことは、巻き込まれても奇跡的に助かった人のお話を聞くことができました。生死は、紙一重であることを実感しました。

渡邊宏海さんの「つとめ」を果たすは、かわいい赤ちゃん誕生から、育児を通して、新川開削の伊藤五郎左衛門に思いをはせています。新鮮な息吹が感じられる好文でした。9 編の寄稿文と 1 名の揮毫による色紙作品をありがとうございました。

悲しいお知らせが 1 つあります。当会の副会長の竹内隆明さんが 2 月逝去 (66) されました。

昨年の新川通信では、元気な様子を紹介していただきましただけに非常に残念です。西蒲原土地改良区に勤められ定年退職後、鎧漕排水機場の管理をしていました。新川を常に見つめていた方でした。 合掌

新川通信・18 号 年 1 回発行
(現在会員数 85 名)

●発行：越後新川まちおこしの会
●事務局：新潟市西区内野山手 2-18-8-6
小泉 勇
電話・FAX 025-261-0235
E-mail : iikoi@r6.dion.ne.jp

入会案内

本会は、新潟市内を流れる西川と新川の立体交差などの近世・近代文化遺産とも言える、新川の歴史およびその流域で育まれた産業や文化について理解を深め、その環境保全につとめながらさまざまな活動を通じて、流域および周辺地域のまちおこしに寄与することを目的に平成 19 年 2 月に発足しました。年会費 1,000 円です。ご入会をお待ちしています。